

<p><b>1 学校教育目標</b></p> <p>持続可能な社会の創り手となる豊かな心と健やかな体をもち、自ら学ぶ児童の育成 ～「気づき、考え、実行する」子ども～</p>	<p><b>2 本年度の重点目標</b></p> <p>①自分を見つめ、他者を理解し、人や社会とつながろうとする子どもを育てます。 ②学習環境や学習教材を整えることで、学習意欲を高め、学習習慣が身に付く子どもを育てます。 ③思考ツールを活用した話す・聞く活動を通して、思いや考えを伝え合おうとする子どもを育てます。 ④「人に優しい言葉遣い」を徹底し、思いやりと節度ある行動ができる子どもを育てます。 ⑤授業や学校行事を通して、健康づくりに主体的に取り組む子どもを育てます。 ⑥よりよい学校生活をめざすため、課題に気づき、解決の方策を考え、実行する子どもを育てます。</p>
--	--

達成度 A:ほぼ達成できた  
B:概ね達成できた  
C:一部達成できなかった  
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	適正な勤務時間を意識した業務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進する。 ・教職員の時間外勤務の増加を抑え、通常及び定時退勤時刻の徹底を図る。 ・時間外勤務時間を月40時間以内とし、達成率を90%以上とする。 ・個人で設定した定時退勤時刻の達成を、月4日以上とする。	・校内サーバー上での情報及び教材資料等の共有を行いやすいように、各分掌事務フォルダの構成を工夫し業務の効率化を図る。 ・各会議内容の精選と重要事項整理に努め、短時間集中型の会議(研修)を図る。 ・掲示板(ホワイトボード)を活用し、連絡事項と協議事項の分別を明確にする。 ・定時退勤(16:45)及び定時退勤(19:00)の実施、徹底を図る。各個人の業務遂行状況に応じて個人定時退勤日を設定し、一律一斉ではなく柔軟な活用を図る。	B	・業務改善の意識が全体で高まった。しかし教材(授業)データ整理については不十分な点があり、最初から作り直す作業が多く発生し、非効率であった。 ・過去のデータを削除・整理し、分掌事務ごとにフォルダを作成した。また、「枚数」と「個人」にフォルダを大別することにより、作成データの混在化が起きないように配慮した。 ・職員会議では、伝達するものと協議するものに分けて時間の軽重を活用してきた。職員に呼びかけ連絡事項はできるだけ掲示板(ボード)を活用するようにした。 ・通常退勤時刻の意識化が少しずつ浸透し、19:00～20:00の間まではほぼ全員退勤できたが、定時退勤の実施は1回程度にとどまっていた。	・来年度4月初旬をめどに、不要な過去データの削除を行うとともに、新メンバー・新担当が使いやすいようフォルダ内の年度別、項目別整理を推進する。特に、残業時間短縮につながるための教材等の共有化や既存書類(文書)の有効活用を積極的に行う。 ・大型の掲示板(ホワイトボード)を用途ごとに準備し、連絡事項と協議事項の分別を明確にして活用する。 ・職場内で統一した定時退勤日は難しいため、各個人で定時退勤日を最低1日は設定する。また、通常退勤時刻を適宜または掲示板に提示し、職員の意識化を促進する。

①自分を見つめ、他者を理解し、人や社会とつながろうとする子どもを育てます。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○人権・同和教育の推進	人権感覚と実践力の向上	・自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを思いやりたりすることができるようにする。 ・人に優しい言葉遣いができるようになる。	・人権・同和教育に関する研修を、児童生徒支援教員を中心に年数回実施する。うち1回は、6年生の部落史学習の授業研究会とする。 ・6年生の「人の生き方」が(部落史・部落問題学習)につながる1～5年生の必須教材を通して、全校系統的に取り組む。 ・運送の授業や人権委員会を通して、児童の人権意識や感受性を育て、玄関ホールに人権コーナーを設け、各学級の人権宣言や児童の感想等を掲示する。 ・人権の日集会やハートフル委員会活動を通して、児童に言葉遣いを意識させる。	B	・人権・同和教育に関する研修は、夏季休業中の小中合同入門講座を実施した。合同研修会については、中学校校舎改築等により日程調整がつかず予定できなかった。 ・6年生の部落史・部落問題学習の授業研究会と授業後進修会を通して、1～5年生の必要事項とのつながりを共通理解することができた。 ・玄関ホールに人権コーナーを設け、各学級の人権宣言や人権の日集会の感想等を掲示した。	・小中合同の入門講座は、昨年度受講できなかった職員も含めて現地研修を行った。合同研修会は次年度から充実させていきたい。 ・6年生の部落史・部落問題学習は社会科教科書の変更に合わせて準拠した形に変えていく。また、1～5年生の必須教材の実施に支援教員が指導アドバイスをしていく。 ・言葉遣いなどの全校的課題については、ハートフル委員会の活動内容見直しで取り組みを図る。
教育活動	○個別の支援を要する児童の理解	不登校傾向のある児童に対する細やかな支援	・毎日、元気に登校できる児童の割合を高める。	・教育相談担当、養護教諭、担任などが連携して、不登校や孤立傾向にある児童の支援を行う。 ・定期的なアンケートを取り、児童の心理面の把握に努める。 ・のびろびろ教育相談研を推進し、情報の共有と有効な対策について協議する。 ・サポートが必要な児童や保護者と面談し、必要に応じてSCやSSW、その他の外部機関との連携を図る。	B	・定期的アンケートを取り、児童の心理面の把握に努めた。のびろびろ教育相談研では、情報の共有化を図った。また、教師の力量向上にも努めた。 ・朝の登校しづり児童や不登校傾向にある児童に対しては、担任任せせず、管理職・養護教諭・級外職員などで組織的な対応を行った。また、中学校やSCとの連携も図って対応した。保護者の意向を確認するだけ対応し、中学校状況が改善した児童もいるが、全てで連携が十分に図れたとは言い難い。	・学級を介する傾向のある児童や不安を抱えている児童の背景には様々な要因があることから、個々の児童の実態把握に努める。 ・朝の登校しづり児童については、個別の支援会議を開き、具体的な対策を協議し実施する。 ・教育相談担当と養護教諭を中心として、今後も組織的な対応を継続する。
学校運営	○特別支援教育の推進	教員の専門性の向上と、個に応じた細やかな対応	・児童一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な支援を行う。	・校内教育支援委員会を年間6回以上開催し、情報の共有を図る。 ・道徳教育推進部会として、特別支援教育に対する見識を深める。 ・年度当初に個別の支援計画や指導計画を活用して共通理解を図り、個に応じた対応を行う。	B	・校内教育支援委員会を中心として、校内で支援を必要とする児童の現状について多面的な視野から把握し、校内でできる対応について話し合うことができた。 ・年度当初に個別の支援計画、指導計画を活用して研修会を行い、職員間の共通理解を図ることができた。 ・LJ傾向の児童等の支援方法の研修会を行ったが、1回にとどまった。	・年度当初に、年間を見通して研修会の計画を組み込んだり、ショートでの研修会を計画したりして、支援の必要な児童の具体的な対応策を話し合ったりする。

②学習環境や学習教材を整えることで、学習意欲を高め、学習習慣が身に付く子どもを育てます。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちや意欲を高める教育活動の推進	・授業後の振り返りの場を設定し、「わかった」「自分でできた」と自己評価する児童が90%以上になることを目指す。	・国語科の各単元終了後に授業の「振り返りシート」への記入を実施し、自己の努力を自己振り返り達成感を味わうことができ、次のステップに向かおうとする意欲を高める。	B	・国語科の授業を中心に「学習の振り返り」項目をワークシートに盛り込んで、自己評価活動を行った。基礎基本の習得と話し合い活動の充実を意図した授業改善に取り組む。学校評価アンケートでは94%の児童が「わかった」役に立ったと回答した。 ・学級活動や委員会活動等でも、一人一人がめあてを立てて、達成するための具体的な方法を考えさせることで、「主体的に行動できた」と答えた児童が76%に達した。	・「気づき、考え、実行する」児童の意識が定着しつつあるが、24%の児童は「自分にとってはまだまだ」と自己評価基準を引き上げていた。自分自身に持つことができなかつたりしている。一人一人の自己変革を求めるとともに、教職員間で児童情報を共有していき、児童や保護者に称賛の意を込めた言葉をかけたりする機会を創出していきたい。 ・来年度から始める「キャリア・パスポート」を有効活用し、自分や友だちの成長について目を向けることで、「自信」や「自己有用感」をさらに持たせていきたい。
教育活動	●学力の向上	学習習慣と学習意欲の向上	・「生活満足1週間」で80点達成の児童の割合を65%以上にする。 ・「書を出す喜びを味わうこと、人前でも自分の意見を言うようになる」 ・学年の発達段階に応じた家庭での学習習慣づくりに取り組み、「家庭学習自己チェック」で「よくできた」と答える児童が80%以上になることを目指す。	・年9回「生活満足1週間」の調査を実施する。1回目の結果から共通課題を見つけ、手立てを講じ、2回目、3回目も検証する。 ・さし入りの時に「詩の百選」を使う。2、3学期にたてわり交流会を設け、お互いの詩を聞きあい、振り返りシートを活用する。 ・「家庭学習の手引き(マニュアル)」を作成して保護者へ児童への周知徹底を図るとともに、「家庭学習自己チェック」の実施を図る。	A	・「生活満足1週間」の80点達成の児童の割合は、5月、11月実施は63%、2月は64%でほぼ目標ラインに到達することができた。一つ一つの項目を見ると20点に達する児童も増え、どの学年も増えていることがわかる。今年も、めあてを高く掲げ、めあてを達成して取り組めることができた。また、家庭などでは実行委員会を中心に活動に取り組むことができた。 ・学力向上対策推進部会を中心に活動に取り組むことができた。 ・学力向上対策推進部会を中心に活動に取り組むことができた。 ・学力向上調査の12月の結果から、ポイントを上昇したものの県平均を下回る結果となった。	・生活満足の結果を毎学期保護者に配布することで、保護者に学習習慣が学習活動へ及ぼす影響などを保護者に分かりやすく訴えたい。「生活満足1週間」の取り組みへの保護者の意識をさらに高めたい。 ・さし入りの時間に、各クラスごとに色んな時間で取り組むことができた。来年度は、学校全体でより明確な(具体的な)目標を定めて、取組をさらに進めたい。

③思考ツールを活用した話す・聞く活動を通して、思いや考えを伝え合おうとする子どもを育てます。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	校内研究の推進及び指導方法の改善	・思いや考えを共に認め合い、高めあうことのできる児童を育成する。	・「単元を貫く計画」「グループ活動での輪読による役割分担」などを柱に、GWで出た意見をGWへつなげるための具体的な方策を全学的な取組として研究を進めていく。 ・協議時に静かな音楽を流し、無言状態による主体的な意見交換(時味・核討等)の場を授業の中で位置づけていく。 ・学力向上対策推進部会を軸としたPDCAサイクルにより、12月の学習状況調査を県平均レベルにする。 ・研究主任が学級間立対策コーディネーターを軸とした組織を確立し、児童の実態に関する指導法改善を推進していく。	A	・各学年、単元を貫く話し合い活動、学習計画を立てて取り組むことができた。PW・CW・GWでは、学年グループごとに児童の発達段階やクラスの実態に応じて手立てを行っていたことができた。 ・「児童委員会」は、高学年グループを中心に授業での実践を行うだけでなく、委員会などでは実行委員会を中心に活動に取り組むことができた。 ・学力向上調査の12月の結果から、ポイントを上昇したものの県平均を下回る結果となった。	・研究推進委員会を中心に、これまで佐志小の職員が増えたPW・CW・GWでの手立て、佐志小メンバーを来年度も継続して行えるように努める。 ・知識、理解を定着させるために、学校と家庭を連携し、家庭学習での学習や読書の時間を確保できるよう啓発を行う必要がある。
教育活動	●学力の向上	読書活動の充実	・進んで読書に取り組む児童を育成する。	・朝の読書の時間をきちんと確保し、1日のスタートを落ち着いて始める。 ・読書ボランティアを活用し、読み聞かせを全ての学年で進めたい。 ・学年毎の目標冊数を決め、達成状況を知らせるなどして意欲の喚起を図る。	A	・朝の読書タイムでは読書ボランティアの方、教師などの読み聞かせを行った。 ・図書委員会では読書ボランティアの方、教師などの読み聞かせを行った。 ・図書委員会では読書ボランティアの方、教師などの読み聞かせを行った。 ・読書ボランティアの方、教師などの読み聞かせを行った。	・学年毎の目標冊数を全員が達成できるように各学年で学期の目標冊数を決め、取り組むようしていきたい。 ・朝の読み聞かせは今後も継続したい。

④「人に優しい言葉遣い」を徹底し、思いやりと節度ある行動ができる子どもを育てます。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	●心の教育	望ましい言葉づかいと無言排除の習慣化	・人に優しい言葉づかいができるようになる。 ・無言で排除をし、きれいで清潔な環境づくりができるようになる。	・生活委員会が「人に優しい言葉づかい」集めに取り組み、やさしい言葉遣いを少しずつ広げることができた。 ・言葉遣い意識はあまり見られなかったが、無言で排除を減らしている。 ・大掃除週間に向けて大掃除のやり方について、掃除の仕方が上手になってきている。	B	・生活委員会が「人に優しい言葉づかい」集めに取り組み、やさしい言葉遣いを少しずつ広げることができた。 ・言葉遣い意識はあまり見られなかったが、無言で排除を減らしている。 ・大掃除週間に向けて大掃除のやり方について、掃除の仕方が上手になってきている。	・委員会を通して、子ども達自身で取り組みを考えるのはいいと思う。ただ、マンネリ化してしまうと、意欲が落ちてしまうので、来年度も新たな取り組みを委員会話し合っていく必要がある。 ・大掃除週間に向けて大掃除のやり方について、掃除の仕方が上手になってきているので、取り組みの重点項目について、特に大掃除で意識をさせていく。
教育活動	●心の教育	道徳教育の充実	・相手の立場になって、気づき、考え、行動できる児童を目指す。	・「特別の教科 道徳」について、道徳必須教材を中心に主体的・対話的な授業実践を研究実践する。 ・道徳教育推進部会として、年間カリキュラムの見直しを図る。 ・あらゆる教育活動を通して、人権教育・道徳教育の視点で、よりよい行動を振り返らせる。	B	・必須教材については人権同和教育部の先生と連携しながら全学年に呼びかけ、実践を促すことができた。 ・年間カリキュラムについては、再検討することができなかった。佐志小の重点項目と関連させながらもう一度検討したい。	・必須教材については、今年度の諸先生の実践されてきた成果や課題をもとに教材の研究を進める。 ・年間カリキュラムについては年度末に各担任の先生方と呼びかけ、実施する時期等について見直しを図りたい。
学校運営	●いじめ問題への対応	未然防止・早期発見・早期対応のシステムの充実	・いじめは絶対に許さないという方針の学級経営を目標とするとともに、いじめの早期発見・早期対応ができるシステムを構築する。	・学級目標や担任の経営方針の中に人権の柱を設定し、いじめは絶対に許されないことを機会を捉えて指導する。 ・危機管理マニュアルを用いて、いじめの兆候があった際の組織的対応を共通理解しておく。生活指導協議会で情報の共有化を図る。 ・いじめ事案発生時には早急いじめ防止対策委員会を開き、組織的に素早く対応する。	B	・「心のアンケート」や「いじめアンケート」の結果を分析し、学級や全体の課題として、道徳や学活で取り上げたり、毎月の生活指導協議会を通して、児童の実態の情報共有を密に行っていた。 ・「いじめ防止対策委員会」を軸とする取り組みは進んでいなかった。また、相手の事を思いやる言葉遣いをする児童も増えてきた。しかし、まだ、相手の気持ちを想像して行動する力が弱い児童もいることが課題である。	・年度当初、「いじめは絶対に許さない」ということ、やさしい言葉遣い「呼び掛け」をしないことなどについて、全クラスで確認する。 ・日常的な指導とともに、授業としていじめ問題を扱ったり、SGEやGWTなどの手法を積極的に取り入れ仲間づくりのスキルアップを図る。 ・全ての教職員で情報交換・情報共有ができるネットワークをもっと強化したい。

⑤授業や学校行事を通して、健康づくりに主体的に取り組む子どもを育てます。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	運動習慣の改善や定着化	・学級や縦割り班で他者と関わりながら運動に取り組むことのできる環境をつくる。 ・児童が自ら目標を立て、進んで運動に取り組むことのできる活動を計画的に行う。	・体育委員会を中心として「スポーツチャレンジ」への参加を推進し、全校にも呼びかけていく。 ・なわとびタイムやマラソンタイムを実施する。 ・児童の発表をもとに、縦割り班対抗で積極的に取り組んだり、他学年が参加できたりするスポーツ企画を企画・実施する。 ・活動の足跡が記録できるカードや、意欲向上につながる掲示、放送でのよびかけなど、手立てを工夫する。	B	・なわとびタイムでは、縦割り班での積極的取り組み、スポーツチャレンジの取り組みにつなげることができた。 ・マラソンタイムについては、朝の時間や、行間休み、授業時間など児童が自主的に取り組むことができていくようになった。 ・スポーツチャレンジの取り組みが進んでいったので、来年度はもう少し早い取り組みがほしい。	・スポーツチャレンジへの取り組みは、運動に日頃から親しんでいない児童の意欲を高めるのに効果的であるため、引き続き積極的参加を促していきたい。また、児童の自主的な活動になるように、掲示物等でも実施していきたい。
教育活動	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・12月の時点で、虫歯の処置完了児童の割合を60%以上にする。(前年度39%) ・好き嫌いしないことと食事のメニューを柱に食育の充実を図る。	・虫歯や歯の治療に対する児童や保護者の意識を「ほけんだより」や掲示物等で高める。 ・歯科医や歯科衛生士による虫歯予防の講話や歯磨き指導を実施する。 ・個別に受診勧告を促し、虫歯予防や虫歯治療へつなげる。 ・食に関する指導の年間計画に基づき、各学年に応じた指導を確実に実施する。	A	・学年別の歯科指導や掲示物での虫歯罹患率の実態を知らせ意識を高め、また個別の受診勧告を数回行うことにより、歯科受診率が昨年度の35%から68%とアップさせることができた。 ・食育週間では、食についての理解を深めるための実践を行うことができた。その他の期間での食育についての啓発は十分にできなかった。各学年への呼びかけを行い、給食の残量を大幅に減らすことができたことは良かった。	・引き続き口健康を意識させ、正しいブラッシングのし方や歯磨きのとりかた等、歯磨きに関する指導が必要。 ・食育週間に合わせて、食育に関する実践実践を行うようカリキュラムに具体的に位置づけることも呼びかけを行う。

⑥よりよい学校生活をめざすため、課題に気づき、解決の方策を考え、実行する子どもを育てます。							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○特別活動の充実	縦割り班活動の活性化	・身近な課題に、学年や学級で取り組み、児童自身が解決策を考え、実行できるようにする。	・日常の中の課題を児童に投げかけ、「こうしよう」という指導から「どうするか」を考え、実践させる指導に転換する。 ・学級会は、年間計画表を参考に学年の実態に合わせて月に1回程度実施する。また学年の実態に合わせて、学期に1回は児童提案の議題とする。そこで決めた事を実行し、評価するサイクルにより、問題解決力を高める。	B	・児童提案による議題を取り上げること、自分たちのごとく課題を捉え、その後の活動に結びつけることができた。	・問題解決力を高めるために、学年の実態に合わせて学期に1回は児童提案による学級会を実施していく。また、実践後の評価をしっかりと行うことで、問題解決力を高める。
教育活動	○特別活動の充実	縦割り班活動の活性化	・縦割り班の遊びや掃除といった異学年交流の場において、児童の主体性や集団の一員としての意識、リーダーシップを高める。	・高学年では活動前に計画、役割分担の時間を設定し、リーダーとしての自覚を高める。また、しろうおタイムは、学期ごとに見直しをもった計画を立て、事前に全校に知らせる。 ・低・中学年では、協力的に参加する態度を養う。 ・感謝や感謝の気持ちを書き、しろうお掲示板で交流する。 ・全校の児童が時間を意識して活動できるように、しろうおタイム活動前後の移動時間に音楽を流す。	B	・活動前後に音楽を流すことで、活動時間、移動時間を意識し、活動をスムーズに行うことができた。今回も同様であった。6年生のリーダーシップも高まった。 ・しろうお掲示板で、感謝や感謝の気持ちを交流することができたが、記入する学年も児童に偏りがあつた。 ・縦割り班活動では、下級生に掃除を教えたり、協力するように指示を出したりしていた。下級生も協力して掃除をする態度が身についている。	・しろうお掲示板の活用のために、活動後付箋紙を各クラスに配布し、記入できるようにする。

4 本年度のまとめ・次年度の取組							
1 学力向上	◎校内研究を中心として「アウトプットプランニング」を取り入れた授業研究を実施し、授業スタイルの共有と授業力向上に取り組んだ。昨年度の課題であった「自分の思いや考えを伝え合う力」を高めることについては、「話し合い」に関する活動を実施し(低学年)、【相手意識を持って話すこと(中学年)】、【話し合いをしながら自分の考えを深めていくこと(高学年)】が、それぞれ見られるようになった。 ◎教師に「子どもが得意なこと」はできるだけ子どもにさせる意識が高まり、児童が意欲的に授業や学校行事を進めたり、自分の考えを分かち合うようになった児童も多々見られた。	◎授業活動に力を入れ、学年ごとに1学期で学校図書を年間借りて読書のための「目標冊数」を決めて読読した。一昨年、昨年と比較して年々貸出冊数が増えている。図書に授業に合わせて貸出活動を進めたり、学習のゴールとしての制作物をイメージさせたりして、伝記・物語・図鑑・辞典(事典)など様々な種類の本を読ませる取組が増えて図書活用が広がった。 ▲学力の個人差はまだ大きく感じ、家庭学習の習慣づけや朝のスキラタイム「さし入りの詩」を計画して取り組む。家庭の協力を得て意識づけをさらに図っていくことと、「スキルタイム」の成果を「校内算数検定テスト」で評価し、十分達成できない児童については取り直しや個別指導を行うこととしている。	4 特別支援教育 ◎それぞれの特性に応じた教育を行ったことで、落ち着いた雰囲気の中で学習できるようになり、自分自身で成長を感じながら学校生活を楽しくすることができた。周りの児童との関係性も良くなり、話し合いを促すことで「学習活動」に取り組むことができた。特別支援教育を中心に、きめ細やかな校内での支援体制を整えていく。また、通常学級に在籍しているが特別支援学級で学んだ児童がより児童の保護者との関係づくりを積極的に行い、人権や道徳の道筋をつけていく。	5 地域に開かれた学校づくり ◎学校の教育活動を地域へ発信し、地域と連携しながら改善に努めている。 ◎これまでのつながり大事に大切に教育計画を立て、学校教育への協力を願っていた。社会科や生活科、総合的な学習の時間などで、外部講師やボランティアの活用を昨年度以上に進めることができた。(学習ボランティア・環境整備ボランティア・社協事業の活用) ◎地域から学ぶだけでなく、学習のゴールとして地域へ発信する授業や、地域行事やボランティア活動へ積極的に参加する児童が増えてきている。このように取組を継続して地域と連携する心を持っていく。	6 小中・保小連携 ◎今年度は、「立憲」「ひびき学習」立ち上げあいさつ「無言排除」の4つを取組の重点とした。来年度は「家庭学習の習慣化」を加えた5つを取組の重点としたい。また、小中連携事業として、小中交流授業研究会、小中合同人権・同和教育研修会、中学校進学説明会、小中合同交流会などの会議や研修の機会、佐志生徒会役員を招いての「運動会」「人権集会」での講話、中学2年生の職場体験などにも取り組むことができた。 ◎保小連携事業として、各種行事(運動会・文化祭・おゆうぎ会)の相互参加を図っている。5年生児童が、唐津保育園、佐志保育園、若葉保育所へ出かけた。佐志小学校へ来校して6年生児童と交流を図っていた。 ◎校区内の園と小学校が連携し、園と小学生の交流を深めたり、入学してからの園児の情報交換をしたりできる場をもちたい。	7 その他の課題について ○ひまわりタイム・時間と場所を設定し、地域の方々や児童とのふれあいの機会を設けた。低学年を中心に参加児童が増え、音遊びや風あそび、お話を聞いたりして地域の文化や楽しみを共有できたと見られた。来年度は、こうした方々を招待して生活力の指導にも生かしていきたい。 ○昼過ぎの「くわんげんげん」・社会体育などになっていない児童のつながり場を増やすことができた。地域の助成により、自分が生まれ育った地域に関心を持っていくようになった。	